

意見書

今回の「天塩川整備計画書」は、北海道開発局の優秀なメンバーの方々が、それぞれ天塩川の最上流から、日本海天塩町の河口までを治水、利水、発電等を専門的な立場から、河川工学的な知識などを駆使しながら、かなりの時間もかけた末に纏め上げたものと推察されます。この事については、私ども一般人には中身を読んでゆくほどにただただ驚くばかりで、とても意見を差し挟めるものではありません。しかしもし、ごく些細なことで、この大きな計画書の中では、見落とされるような部分でもあればと考え、書いてみる事にしました。

私は魚釣りが好きで、本格的に始めてから、36年ほどになります。魚釣り仲間でも色々なタイプがありまして、なかでも非常に専門的で、緻密で、魚の事河川湖沼の事、その道具の事、天候の事等釣りに関わるすべてに対してとても神経質な人が居り、これに反して非常に感覚的で、上記の事にはあまりこだわらない運動神経そのもので釣りを楽しんでしまう人もいます。若いときの私は後者のタイプでした。しかし歳を重ねるにつれて少しずつ前者に傾くようになり、今はどちらかと言うと、専門的なことに興味を持つようになりました。

さて、前置きはこのくらいにして、今回私は次の三つのことについて意見を述べたいと思います。勿論私は「リバーネット」士別支部会員ですから、範囲は、風連町20線の堰堤から上流を考えての事です。

(1) 風連20線堰堤から東士別頭首工まで七つの堰堤がありますが、この内いつでも魚が溯上できる魚道を持っている堰堤は三つ（内一つ下士別頭首工は現在造成中）という事で、残りの四つも整備計画に入っていますが、その工事期間はこれから30年間、気の永い話で（私は完成時この世に居ません。）しかし、完成の暁にはサクラマス（5～6月）カラフトマス（8月以降）シロザケ（9月以降）、が岩尾内ダムの下までそれぞれその間の小河川に入り産卵に適切な上流をめざして遡上します。シロザケだけは多分天塩川本流の朝日町当たりで産卵場所を求める事になるのではないのでしょうか？シロザケはあまり水深のない流れが緩やかで中位いの玉砂利を敷き詰めたような場所に産卵します。サクラマスに関しては、途中にある小河川に入ってかなり上流で産卵すると思います。稚魚のうちメスの大部分とオスの一部は天塩川を延々と下って海に出ます。川に残るサクラマスの子は（通称ヤマベ）は当然釣りの対象魚で、小河川と本流を行き来するので、ヤマベの非常に豊かなすばらしいフィールドになります。ヤマベを求めて大勢の釣り人が集まり当然の事ながらこの沿線にある市町村に落ちる経済効果はかなりのものであることは想像に難くありません。

「魚道」と一言で表現しても、我々の常識では春夏秋冬いつでも魚が上れるものでなければなりません。堰堤の水門の一部を倒して段差を無くしたときだけ魚が上れる装置は魚道とはいえないのです。これは前述のサクラマスやサケの

為だけではなく、ウグイやドジョウ、アメマス等も行き来しますので、本当の意味の「魚道」がなければ、そういう小魚までも減少させてしまいます。

現に、土別の堰堤から上流上土別、朝日まで、昔はあれほど居たドジョウ、カジカは殆どいません。ウグイも滅多に出会うことはなく、人間が放流したニジマスやヤマベが加ろうじて生きているという真に情けない状態です。

(2) 風連の堰堤から岩尾内ダムまで、すべての魚道が完成するまで30年以上となると、私どもにとっては気の遠くなる話ですが、その事はそれとして、それまでの間、この沿線に住む老人や子供が、みじかい春から晩秋にかけて自然の美しい近隣の山や川に接する事は当然なくてはならないリクレーションで日本では遥か北方に住む我々の特権でもあります。そんな時、なるべく近隣の川つまり天塩川へ行き川辺に立っても、滅多に魚とも出会えない、というのでは、情けないばかりか、生きている甲斐もないと言う事にはならないでしょうか。

今私はアングラーズという、もう10数年続いている民間の遊魚放流の会の理事長をしております。会としては特段の実績をあげているわけではありませんが、年に一度は必ず会員が金を調達してニジマスとヤマベを養鱒場(業者)から購入して、半径十数キロ以内にある河川湖沼に放流しています。たまたま近くの川や湖沼で大物のニジマスが上がったとか、十二、三センチのヤマベが何匹も釣れたとか情報が流れたり新聞に出たりしますが、こんな所でもまだヤマベが上がってくるんだな、など知らない人はまるでこの天塩川に忽然と湧いて出た如くに感じているようですが、殆どこの近隣にいる魚はわれわれアングラーズが放流したものか、或いは我々と同好の個人が自腹で放流したものか、なのです。そして我々が最も悩む事はこれだけ放流を繰り返しても少しも魚が増えてこないという事です。何故増えないのか? これは心無い釣り師が放流したばかりの稚魚を釣れるだけ釣って、すべて持ち帰ってしまうからです。以前は河川改修とか農薬の混入が原因とかにその理由を押し付けていましたが、その事はかなり改善されてきたので、減少のもっとも大きな原因は「心無い釣り人」だとされています。内地は今ブラックバス問題で紛糾しています。バスがなかなか減らないのは、姿が不恰好で美しくないから釣り人の殆どがリリースしてしまうからです。北海道にバスはむかないと思うし、バスを入れまいとする姿勢は正しい事だと思います。だから美しいマスやサケの類が多く棲む水質のきれいな河川や湖沼を北海道の象徴としたいとは思いませんか? 30年経過してサケやマス類が自然の営みを具現できるようになるまでは、人工的に我々アングラーズが、ヤマベ、ニジマス等を放流し続けることは大変なことです。若い仲間たちの情熱を鼓舞しながら頑張りたいと思っていますので、是非この点についての、ご理解とご協力をお願いしたいと考えております。

(3) 1, 2で述べた魚類が無事に成長し人の目に触れるようになる為に更に

重要な事があります。それは水位です。天塩川の岩尾内ダムから上士別町くらいまでの間、毎年 9 月以降水位が極端に減ってしまい最も上にある東士別頭首工のあたりは河原が出て小川のようになり、長靴だけで何処までも歩けるようになってしまいます。これではすべての堰堤に健全な魚道が出来ても魚は育たないし、前述した「心無いえさ釣り師」に殆ど釣られてしまいます。ダム下から以降の川の水位を常に一定に保つ事は出来ないのでしょうか。「整備計画」にこの事は書かれていないので、是非ご考慮いただきたい。9 月以降のダム放水を止める事にはそうせざるを得ない別の理由があることと推察しますが、水位を常に一定に保つにはどうすればよいのか私には専門知識がないのでわかりません。しかし魚の保全の為には他のすべてが改善されても無意味な結果となるので何とかご考慮いただきたい、と思う次第であります。水面から見た天塩川の姿もさることながら、水中もきれいで、形の良い魚や、水生昆虫がうようよいる北海道の河川に果てしない希望を持ち続けたいと心から想うわけであり、

以上、